

『辛酉紀行』伝本に関する研究

―伝小堀遠州自筆本をめぐって―

はじめに

『辛酉紀行』は茶道流派・遠州流において、流祖である小堀政一（一五七九―一六四七）（以下、遠州と称す）の自筆本が現存する著作であると伝えられてきた紀行文である。特に重要視される伝本は、鴻池家旧蔵本（以下、鴻池家本と称す）と益田家旧蔵本（以下、益田家本と称す）である。鴻池家本・益田家本は茶道流派・遠州流宗家である小堀家に伝来した伝本であり、遠州流十二代家元である小堀宗慶氏によって遠州自筆本であると指摘されている。さらに宗慶氏は鴻池家本・益田家本に確認できる本文異同から、鴻池家本が「原本と考えられる」伝本であり、益田家本は「多少文章を訂正した」伝本であると指摘する。しかし宗慶氏によって提示された本文異同は二箇所

藤原みずき

みであり、本文全文を通しての異同の指摘は行われていない。二本の成立関係を考察するには不十分であると推考する。そこで小稿において鴻池家本の本文全文を提示し、益田家本との異同を示す。二本間に確認できる本文異同から、鴻池家本・益田家本が遠州自ら書写した初稿本と改稿本である可能性は低いことを指摘する。なお異同内容の詳しい分析と鴻池家本・益田家本の成立関係に関する考察については、拙稿「『辛酉紀行』伝本に関する研究―鴻池家旧蔵本・益田家旧蔵本について―」¹⁾に述べている。

また遠州流において定家様が流祖遠州から継承される流派の権威を示す書風として重要視されていることを確認し、定家様で書写された『辛酉紀行』伝本である鴻池家本・益田家本が遠州自筆本として伝承されるに至った可能性を指摘する。

なお小稿で取り上げるテキストは伝本によって書名が異なる。小稿では国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースにおいて使用されている統一書名より、『辛酉紀行』を用いる。

一、『辛酉紀行』の概要

〈書名〉

書名は現存するテキストによって異なり、次のようなテキストをもって確認することができる。

- ・「関東道記」
- ・「小堀遠州侯道記」
- ・「小堀政一紀行」
- ・「あつまよりの道のき」

〈成立年次〉

新日本古典籍総合データベースには「成立年…元和七年」とある。『群書解題』（井上豊氏執筆²⁾）は、『辛酉紀行』十月四日条の「是まで旅の向後のつれくくなるまゝに、なにならぬおかしきことども筆にまかせ侍る。今は、やおほやけ事などさしつどひて、きのふのうきも恋しき程におぼえて都に入ぬ、」とい

う記述から「旅中書き綴ったものらしい」と指摘する。

〈内容〉

『辛酉紀行』は元和七年（一六二一）九月二十二日に江戸を出発し、十月四日に京に着くという十三日間の東海道の旅を書いた紀行文である。元和七年における遠州の行動について、藤田恒春氏「小堀政一の居所と行動³⁾」を確認すると、九月十七日には江戸へ下向、十月十九日には帰京している。以下に引用する。

九月十七日江戸より藤村三入へ「鰻鮓」の礼状を送っており、これより以前に江戸へ下向していたことを確認できる（「上林家文書」）。（中略）十月十九日西洞院時慶は、使者を政一へ遣わし、十二月十八二十一日の両日にも書状等を送っている（「時慶卿記」）

さらに『源敬様御代御記録』⁴⁾元和七年十月朔日条に、「小堀遠江守・北見五郎左衛門御招御振廻有之」とあり、喜多見勝忠（一五六八―一六二八）とともに尾張藩主徳川義直（一六〇一―一六五〇）の饗応を受けたことが確認できる。『辛酉紀行』九月卅日条に「熱田の宮に着一宿」、十月一日条に「国守の御もとより殊懇にいたはり給ひて」とあり、『源敬様御代御記録』の記述と一致する。以上の記録から、『辛酉紀行』が元和七年

における実際の旅を記した作品であると指摘できる。

〈特色〉

主に和歌を詠むことによって本文が進められていることが挙げられる。『群書解題』には「洒落けの多い流暢な文章で、狂歌調の勝つた和歌がところどころよみこんであつて、近世風の特徴が見える。文章でも和歌でも掛詞の技巧にとくに興味をよせている」とある。加えて『辛酉紀行』には「古今集」「新古今集」に収載される和歌の引用や『伊勢物語』をはじめとする王朝文学を踏まえた記述が随所に見られる。遠州に実際の旅を通して物語的世界を追体験する意図、王朝文学を踏襲した作品を執筆する意図があったことが指摘できる。以上のような『辛酉紀行』の特色について、井上宗雄氏は「ペダンティックともみられるが、この紀行文の基調が、まさしく古典・古歌を背負った雅文体であることを示している。」と指摘する⁵⁾。また小堀宗通氏は「彼の王朝文学に対する並々ならぬ理解と素養が窺われるのであって、これが他の文学と異り極めて気楽な態度で記されているだけに、一層その感を深くする。」と指摘する⁶⁾。さらに森蘊氏は「もとより日記というものは、他人に読ませるものではないはずなのに、遠州の場合は読者を意識しているといっ

てよいほど、どこかに一つの芸術作品を残すのだという思慮が働いているように思われる。」と指摘する⁷⁾。

二、鴻池家本・益田家本について

鴻池家本・益田家本は、茶道流派・遠州流十二代家元である小堀宗慶氏によって遠州自筆本であると指摘される伝本である。さらに宗慶氏は鴻池家本・益田家本に確認できる本文異同から、鴻池家本が「原本と考えられる」伝本であり、益田家本は「多少文章を訂正した」伝本であると指摘する。鴻池家本・益田家本ともに現在の所蔵者は不明であり、原本の調査を行うことができない。どちらも影印を収載する図録が存在しており、原本は現在まで伝来していると推考される。小稿では図録等に収載される影印及びその解説を用いて、鴻池家本・益田家本について確認する。

まず鴻池家本の書誌について、小堀宗慶氏『小堀遠州東海道旅日記上り下り』（以下、『旅日記』と称す⁸⁾）収載の影印及びその解説より以下にまとめる。なお『旅日記』収載の影印からは、鴻池家本の本文全文が確認できる。また筆者が管見に及んだ限りでは、『旅日記』以外に鴻池家本の影印を収載する図録は存

在しない。

卷子本一卷。料紙に天界二本、地界一本を引く。内題はなし。外題および書写奥書の有無については影印で確認することができず、宗慶氏による解説にも記載はない。定家様の筆蹟。鴻池家本の伝来について、解説に「明治維新の際、小堀家より出て、一種の巻は大阪鴻池家に」とあり、明治維新までは小堀家に伝来していたようである。現在の所蔵者については明確ではないが、宗慶氏による「後記」の記述から一九三八年には小堀家に所蔵されていたことが確認できる。以下に引用する。

小堀遠州の東海道旅日記を初めて読んだのは、中学五年生の頃だと思えます。丁度その頃、遠州家の書、定家様の勉強を始めていましたので、父の許しを得て家蔵の書を熟読する事を心がけていた時に、旅日記に出逢いました。

次に益田家本の書誌について、主に『遠州蔵帳図鑑』^⑩に収載される影印及びその解説より以下にまとめる。なお図録に収載される益田家本の影印は一部のみであり、本文全文を確認することはできない。

卷子本一卷。縦二九・五センチメートル。料紙に天界二本、地界一本を引く。内題なし、箱書外題に「道之記」とある。書写奥書なし。定家様の筆蹟。下りの巻とともに桐の内箱に一卷

ずつ、杉木地の外箱に二巻一箱に納められる。また遠州の三男である小堀権十郎蓬雪（一六二五～一六九四）ならびに小堀正優（八世宗中・一七八六～一八六七）筆とされる箱書がある。『特別展 小堀遠州とその周辺―寛永文化を演出したテクノクラート』^⑩の解説より、以下に箱書の文面を引用する。

（外箱蓋ウハ書）

上下道之記／宗甫筆蹟／箱上書蓬雪筆／式巻／但上巻之箱政尹／下巻乃箱政尹／上箱書付政広

益田家本の伝来について『旅日記』には「下りの巻と一箱になって、益田鈍翁に伝来していた」とあり、益田鈍翁（一八四八～一九三八）の没年以前に発行された『遠州会展観図録』^⑩「遠州蔵帳図鑑」にも鈍翁蔵の記載がある。鈍翁没後の所蔵者についてはいずれの図録にも記載はなく、現在の所蔵者は不明である。さて、宗慶氏は『旅日記』において鴻池家本と益田家本の二本間に確認できる本文異同から、二本の成立関係について次のように指摘している。

遠州自筆の旅日記上りの巻に、原本と考えられるものと、多少文章を訂正したものと、二稿が存在する。（中略）両家に所蔵されていた巻を備さに見ると、ほとんど同文であるが、鴻池家所蔵巻が先に書かれ、益田家巻は文章を前後

させて読みやすくしてあり、また、内容をやや詳しく述べたり省略したりしている箇所もあるので、鴻池家本を第一稿、益田家本を第二稿とし、

さらに異同が確認できる本文として冒頭九月廿二日条を提示し、「第一稿と比較すると内容はほとんど同じで、文章が簡略になって読みやすい」と述べる。しかし『旅日記』において廿二日条以外に提示される益田家本の本文は二箇所のみである。一つは廿三日条の解説に

第二稿益田家本の二十三日の条を見ると『廿三日天晴月猶清 かな河を立 かたひら里 藤沢を経』と書き出しているので、

とあり、もう一つは廿九日条の赤坂の和歌について

益田家本では歌は『雲晴て日はあか坂の里といへど』となっている。

と指摘するのみである。鴻池家本・益田家本の成立関係を指摘するには、二本間に確認できる本文異同の提示が不十分であると推考する。

そこで拙稿『辛酉紀行』伝本に関する研究―鴻池家旧蔵本・益田家旧蔵本について―¹²⁾と重複するところもあるが、鴻池家本の本文全文を提示し、益田家本との校異を示す。結論として、

鴻池家本・益田家本の二本間に確認できる異同は、本文全体を通して存在することが指摘できる。これほど異なる本文が、どちらも遠州によって書写されたとは考えにくい。また異同の内容からも、鴻池家本が初稿本であり益田家本がその改稿本である可能性は低く、また遠州自らが書写したテキストである可能性も低いと推考される。

三、鴻池家本の翻刻および益田家本との校異

【凡例】

一、鴻池家本の本文は『旅日記』に収載される影印より確認する。

一、益田家本の本文は影印によって全文を確認することができない。そのため益田家本の転写本であると推考される内閣文庫蔵『小堀遠州侯道記』を用いて本文を確認する。¹³⁾

一、鴻池家本の本文は上段、益田家本の本文は下段に提示した。

一、可能な限り忠実に翻刻するようにつとめ、改行についても底本通りとした。

一、平仮名・片仮名は、現行の字体に統一した。

一、踊り字は、底本の通りに示した。

一、底本に存する校異・付訓・注記などの類は、可能な限り底

本に従って忠実に示した。

一、校異の掲出は、相違する箇所^①に丸数字・傍線を付し、下段に示した。

一、漢字の新字・旧字・異体字、平仮名と片仮名や仮名遣いの

相違の類は掲出から省略した。

一、漢字・仮名の別、例えば「也↓なり」の類は、掲出から省いた。

一、「着・着く」や「午時・午の時」などの送り仮名の表記の相異は掲出を省略した。ただし、送り仮名に相異が見られる場合は掲出した。

【校異】

①西九月

①元和七年

廿二日^②天快晴午時許ニむさしの江戸

②朝天快晴午時許武蔵国

を立^③したしき人くこのこ、かしこ馬の

③ナシ

餞すとして申時許品河の里をいて、

いそきけれども酉時許^④神奈河里二

④かな河に乗燭ほとにて着此里一宿

着此所に一宿乗燭ほとに又ともたち

の名残おしみて馬餞すとして^⑤酒肴

⑤くた物

小壺に^⑥茶を人文添てをこせたりその

⑥ちやなど

返事^⑦取集たる言種いひやる次ニ

⑦した、めつかはしける

別といふ心を

かへりこむとちきるもあたしひと

こゝろさためなき世の定めなき身に

⑧ 永夜も燈に向ひて聴鷄鳴しも

ひと共の聲してうちしはふきて夜

もはや曙なむといふをき、て⑨ 旅行

別後朝思といふ⑩ ことを

日数経はすえは宮こやち

か、らむ別物うき昨日けふ哉⑪と

書て使ハ返しぬ

廿三日① 天晴② ③ 立神奈河帷里藤沢

を④ 過て舟渡を⑤ 経て大磯二かゝる

そこを⑥ ゆき過て⑦ 磯邊を通る風静ニ

浪の音をたやか也ひとに問へハ爰なむ

こゆるきのいそといふ⑧ をき、て⑨ 寄名

所別といふ⑩ 心を

こゆるきのいそかぬ旅もすきて

行別路とめよあしからのせき

なを⑪ ゆきく、て夕陽山の端にかかると

さく河のさとを過さ河を渡りて

小田原に着一宿思の外⑫ 友の人来て

ひとりふたりして語て其夜も深ぬ

⑧ ナシ

⑨ 又

⑩ 心

⑪ ナシ

① 暁 ② 月猶清 ③ かな河を立

④ 経 ⑤ して

⑥ ゆきく、て ⑦ 小田原近くなりて

⑧ ナシ ⑨ ともとする人の

⑩ こと

⑪ ゆくほとに

⑫ の

聴鷓鳴より雨降^⑬出風烈浪の音

高忍別旅宿枕といふこゝろを

よるなみの聲にめさますかり

枕忍ぶ別の夢ぞみしかき

⑬ナシ

廿四日雨降^①風不止けふはこゝにとゝ

まるへきなといふ巳時許二天晴風^②も

しつまる^③立小田原湯本相雲寺

を過てあしからの山にかゝる

遠近に重る山と谷とのこすえ色と二

染出すにしきをさらすかとうたかふ

あまりの面白き二ゆきもやらすとある

岩かねにたすけられて獨見る

山^④の紅葉といふ心を

思ふかひなき世也けりあし

からの山の紅葉も君しなけれは

やうくやまを^⑤よちてあし河の^⑥新宿二

着^⑦暫休息してそれより山中^⑧の里

を過て夕陽と、もに山をくたりて

三嶋の里二着一宿折節思ひ

①ナシ

②又静也

③小田原を立

④ナシ

⑤のほり ⑥宿

⑦ナシ ⑧ナシ

出る事ありてうた、寝の夢覚て

かり枕かたふくるよりうた、ねの

夢をみしまのひとのおもかけ此哥の

詞書思子細有て委^⑨か、す

⑨ハ

廿五日晴天なりといへ^①と風^②な、めならず

③立三嶋沼津を^④原の宿二かゝる

面前^⑤砂吹懸行歩^⑥叶かたし

⑦ともにさふらふ人のかくうき嶋か原

よといふをき、て^⑧まことにかきりなき

旅をもする哉何国をやと、定むへき

かたもなしゆきとまるをそやと、とさ

たむるの哥の心おもへは風雲流水

の生涯なるかなとこ、ろほそく

住はてむやとハ^⑨いつことしら浪に

身をうき嶋のよるへしられす又

ともなるおとこの馬に乗たるか風に

ふかれてたへかたさのあまり^⑩にや

かくいふ

むさしあふみにたにかけて

⑩に

⑨いつく

①とも ②なのめならず

③三嶋を立て ④原宿出る

⑤に ⑥難叶

⑦ナシ

⑧ナシ

大風にのらぬもつらしのるもう

き嶋おかしく思ひて此まきれにやうく

うき嶋か原を過て吉原の^①里に着

暫休息して風少静るほとに此宿を

いて、富士のすそ野河の邊に^②着ぬ

渡守はや舟に乗れといふ^③此山を見れば

白雲山をかくさむとすれともはるかか

すそ野にたなひき雪一むらの高き

事八目も及かたし時の間に色くくに

移替景氣詞に述べたたく折節友と

するひとの^④いふ此山を都の邊に置いて我

思ふ^⑤人くに見せてなと^⑥戯てかく南

見ても又又も思ひをするかなる

ふしの高ねをみやこなりせは又

山の戴より煙の立を見て寄富士

思といふ心を

わかおもひいさくらへ見むふし

のねのけふりハたえぬひまやあり南

此哥^⑦も夢をみしまの心にや^⑧侍るらむ

とかくまきはして^⑨蒲原の里に着

① 宿

② 着

③ ふしの山

④ ナシ

⑤ ひとに ⑥ いふ其男の

⑦ ナシ ⑧ あらむ

⑨ 神原

また日たかけれともけふハかせの
さはきもくるし行衛もおなし

旅のやとりならむかしとて此里ニ

⑳と、まるいぬの時許ニしる人の尋来て
かたりて其夜も深ぬ明れは

⑳と、まりぬ

廿六日天快晴風静也昨日のそらに

似す^①立蒲原ゆ井の塩屋はるく^②の渚を

過て清見か関にいたりぬ寺にのほりて

見るに後ハ山高聳岩松^②無心^③といへとも

山風に吟石はしる瀧の音に調を合

たるハ廣長舌におなし前にハ海上

漫々として霧にこまれる松原ハ帯の

ことくにて波上に^③浮^④ひ釣^⑤の小舟ハ浪間

に見えかくれかのあかしの浦の嶋かくれ

ゆくといへることを思ひいて、詞に述む

とするに物いはれす書ハ詞を尽さず詞ハ

こ、ろをつくさずといへり寔にこれ

ならむかしあきれて時も移ぬ

東路のいつこはあれときよみかた

①此里を出て

②こ、ろなし

③うかみ

④浪間にうかふ三保の松原いつまで爰に

あるへきそ日も⑤はやかたふくといふ此関ハ

心なきひとのために⑥こそ扉結けむと

かたりてやうく寺をくたりて江尻の宿ニ

着⑦此国のあつかり人⑧我したしければ⑨来

て⑩此さとにてまうけなとしてはるかに

ほとへて此宿をいて、うは原吉田の里

をこえて府中に着むかし住馴たる

府なれはなつかしうおほえて我ありし

やとを立より⑪見るに門前草深く

見しにも⑫あらず

住なれしやとは葎にとちられて

秋風通ふ庭の蓬生それより⑬河原に出る

木枯の杜なかめやりて

今更に猶うらめしき旅衣きては

うき身をこからしのもりゆきくつてまり

このさとにかゝる駒の口ひきたる男杵

といふ物を買むといふわらはへの立

出て價を高くいふなと⑭かくいふそと、

かむれはうちより⑮も女房の聲して

④霧間

⑤ナシ

⑥ナシ

⑦此所

⑧ナシ

⑨きたりて

⑩ナシ

⑪見れば

⑫あらぬさま也

⑬あべ河

⑭て

⑮ナシ

①6 しゆく

こ、ハまりこの^{①6}里にて沓のねの高き

也といふ口ひきのおとこハ是をこゝろへ

ねはいらへせずよしありて覚へければ

爰にて買すともありなむあすかひ候へ

くさきにもありくと^{①7}戯てゆき過て問へは

しかくの人の劣へ居たる也とかたるさも

あらむかしそこを^{①8}ゆき過てうつの山に

いたりぬ此里を見ればしろきもちの

霰の^{①9}ことくなるを^{②0}器に入て是めせと

いふ^{②1}とへはたうたむことて^{②2}此里の名物

也といふさてハもろこしより渡たる餅

にやあむなるといふさにハあらず

十つ、^{②3}杓ふによりてとをたむこと^{②4}いふ

也とかたるさらは^{②5}すくはせよといへは

あるしの女房手つからいひかいとりて

心のまゝにすくふこれになくさみて

暮に^{②6}ければうつの山にかゝる^{②7}もとより

つたかえてハしけりてとある所なれ

はいとくらふ道もほそきにうつゝとも

わきまへ侍らす

①7 いひて

①8 ゆきくゝてうつのやの里にかゝる

①9 やうなる ②0 うつは物

②1 なにそと ②2 此所

②3 すくひ侍る ②4 いふと申す

②5 すくひて見せよといふ

②6 けれども ②7 さらてたに

さらたてたに夢のうき世の旅

の道をうつゝともなきうつの山こえ

ゆくえは岡邊の里に着一宿其夜は

岡邊の松風に夢をおとろかし明レハ

廿七日天遠晴暁月と、もに岡邊を出て

①藤枝宿せと鳴田を過ておほ井河の邊二

着ぬ②住馴たる都のおほ井河思ひ出ら
れて

なにしおは、いさ事とはむおほ井河

山の紅葉はありやなしやと河の面を見れば

水はやう瀬瀬の数くを見るに行わつらひて

こえわふるあらしの瀬瀬おほ井河の

浪かけ衣ほしそかねぬる③からうして河を

わたりて金屋の里に着て④少時休して

衣をほすく佐夜の中山にかゝる年たけて

又こゆへしのうた思ひ出られて哀也過にし

年月此山をこゆるたひく命也けりとなか

めてそこえし今またこゆるもしか也

とこしかた行先思ひつゝけて

①藤枝

②住なれし

③やうく

④しはらく休息して

おもひきやすきし年くいくたひか佐夜

の中山又こえむとはやうく山を^⑤こえて

新坂の里二着それより懸河の宿にかゝる

昔年見しあるし^⑦立出て暫ととむる

しはしとてとむれば腰を懸河の

宿のすのこに腰ハひえけりとして土器^⑥とり

あけて立出ぬ袋井の里を過て見付の

国府に^⑨着里人に逢て^⑩此所をなに、よりに

かくいふそととへは^⑪富士山を初て^⑫見付けるに

よりてとかたるさてハこれよりも見え^⑬侍ける

かふしきさよと^⑭いへは此おとこそらめを

つかひて今も見え侍る事もや^⑮候覧

あのしろき雲のうちになといふ見れとも

見えす

白雲の絶間絶間をそれかとして終にふし

をは見付さりけり^⑯宿に入^⑰此所に一宿

しるひと尋きて酒のませ物くはせなとして

取集たる物語して永夜もとりくにしきる

臥程もなし曙レハ

⑤くたりて

⑥ナシ ⑦の

⑥とりあくるほとして

⑨着て一宿 ⑩此里

⑪里のおとこかたる ⑫見付たるに

⑬かくといふ ⑭侍る

⑮いふ

⑯あらむ

⑰宿に入ぬ ⑱ナシ

⑲しる人の来りて

廿八日^①朝天晴あたり近き濱松の城守

^②しる人なれば使をこせたり見付を出て

中和泉を過て天龍の^③舟渡経て濱松ニ

^④かゝる城守^⑤又使を出すあないせさせて城ニ

入遙ニありて午の時許ニ細雨降出ぬけふハ

留るへきよし懇にいふされとも今夜は

いまきれのほとりまてと思ふとて^⑥立出ぬ

城主名残おしみてはるくをくりて別ぬ

細雨なれば風さへ静也まことに名に^⑦し

あふ濱松双ひたり汀に寄来る浪の

音も松の^⑧ひゝきも聞に妙也

浪の音にはま松風の吹合せ折から

琴の音をや調ふる細雨なれば濡る

ほともなくあらゐのわたりに着俄に

風はけしく成て浪の音高し雨も頻也

山風の秋の時雨を吹来てハ浪もあら

井のわたし舟哉袖もほしあへす舟より

あかる^⑨此所に一宿^⑩秉燭ほとに京より

文^⑪もちて来る故郷の事ともきくく

夜も深ぬ雨風止す

①ナシ

②ナシ

③わたり

④着 ⑤むかいをこせたり

⑥いてぬ

⑦あふ

⑧風

⑨此宿にと、まる ⑩ナシ

⑪をこせたり

廿九日暁天晴風はまだあらるの里を

出て夜ふかししらすかの里^①を通る

よをこむる道の便の竹の杖行衛

をとふにしらすかの里^②夜のほのくくと明る二

塩見坂を^④のほりてはるくくの谷を^⑤行

細き河あり問へハ是より^⑥参河国といふ

^⑦そこをゆきて里あり二河といふ

国は三河里は二河合すれはいつかは

かへりつかむ故郷それより輿に乗て

一睡眠夢覚て^⑧問ははや吉田の里^⑨ニも

着ぬといふ夢の中にはるくくの道をも

来ぬる事よと思ひて

ゆめとてもよしや吉田のさとならむ

覚てうつ、もうき旅の道^⑩此所の城守

ことに我親きひとなれハ立寄て對面

せむ事をいひやる城守例ならぬに

よりて京へといふそこを過て橋を渡て

こさか井といふ所に^⑫至ぬ友とするひと

の中に摂泉堺の津をしる人あり相坂

①にかかる

②はさらに ③ナシ

④のほりはるかの ⑤行て

⑥三河の国也

⑦ナシ

⑧とへは ⑨に

⑩此宿にするひとのありてしはくかたり午の時許にい
て、 ⑪ナシ

⑫いたる

関より西の名津也此所も堺といふ名は
おなしけれども所からハ似す是は寔に

小堺なりと¹³戯ければさと人きゝて此里

の端に小坂のあるによりて¹⁴小坂井也

とかたる¹⁵そこを行過て五位の里に¹⁶至る

東路にさとの名おほけれどもかく

くらゐの高き¹⁷里はなしといへは又ある

ひとのいふ鳥にも似たる里の名かなと

いろく¹⁸にをかしき事とも下ひとの¹⁹いふ

をきゝてあか坂の里に着つゝきの里

を長沢といふ

雲晴て日はあか坂の里²⁰なれと旅

の行衛の道のなかさは²¹ゆきくゝて二むら

山に至ぬ此山の中に寺あり法藏寺といふ

立²²寄て一見

三かはなるふたむら山をはこにして

中へいれたるほうさうし哉此山を見るニ

青葉にまじる紅葉のあらしにさそハレ

さなから錦をたつかことし

ふたむらの山の秋風はけしさに紅葉の

⑬いふ

⑭かくいふ

⑮わらひて行衛ハ ⑯いたりぬ

⑰里の名

⑱ナシ ⑲かたる

⑳といへと

㉑なを

㉒より

にしきゝてもこそ見れそれより藤川と
いふ²³所に着一宿明レハ

②3里

卅日天^①快晴あたり近き岡崎の城主しる

①晴あたりの

ひとにて消息あり其書ニ遙音信を

きかす此比もやと待侍し藤川に着ぬと

きくより對面せむ事をよろこふと

ねんころにいひをこせたり返事に

今朝は猶いそぎ出ぬる草枕我をか

さきにひとのまつやとやかてと書て使は

返しぬ日出るほとに岡崎に着城主^②迎

②もとしぬ ③出ぬ

とて出るともなひて城に入^④暫物語して

④しはく

巳時許に城を^⑤出る橋をわたりてやはきか

⑤出て

宿に入城守^⑥名残おしみて此宿まで贈て

⑥此までをくりていてぬ

来る互に馬を留て

ものゝふのやはきかしゆくにいるよりも

なをたのみあるひとこゝろかな

城守返し

ものゝふのやはきか宿にいる弓もをし

てかへれはかひやなか覽とて城主も帰ぬ

立別てやつ橋といふ所にいたりぬ杜若
の名所なれはおほくある覧と思ひて
見れともなし

やつはしにはるくときてみかはなる

花には事をかきつはたかなと^⑦いひければ

ともなふひとくかきりなくおかしかりてこれに

興してちりうの里^⑧二着ゆきく^⑧て河の

ありけるをとへは参河国と尾張の国^⑨の

堺川といふはや尾張の国にも入ぬるよといふ

^⑩けふハ九月卅日なれは

東方みちをはゆきも^⑪つくさねと

秋はけふ^⑫こそおほりなりけれと口す

さひていも川あのありまぢの宿をも

過て鳴海の里に着友なふひとの中に

年ことのにほりてハ又くたれともなにと

なる身のはてハしられすそれより^⑭笠寺

山崎の里をこえて熱田の宮に着一宿^⑮

神無月一日天遠^①晴風閑也人く宮へまいる

へしといふ

⑦ わらひて

⑧ を過て

⑨ ある ⑩ との

⑪ をきゝて

⑫ をはねと

⑬ より

⑭ かさ寺の宿

⑮ 曙レハ

① 快晴

里の名もこゝハあつたの宮なれば

② けふより冬の神無月哉とて神前へハ

まいらす③ 此国のかみの御もとへさしていふ

へき事④ 侍るによりてけふハと、まりぬ

国守の御もとより殊懇にいたはり給ひ⑤て

御ふねなと給りて暮かゝるほとより熱田

を出てはるくゝの海路を経てはや伊勢国

桑名の里に着舟よりあかりて

ふな人のこかれていせに着里をくはな

ときけと旅ハくるしきとて⑥夜も明るほとに

⑦ 此里を出る

二日天晴風烈巳の時許① 二風静る四日市

場②といふ所に着③ 此里にしるひとあり

立よりて午時許ニ出て濱田のさとを過て

日なかの④ 里にかゝる

⑤ 里人は⑥ 日永の宿とをしゆれと折しも

冬の日こそみしかきとて駒をはやめて

つえつき野にかゝる⑦ かち人のくるしきにや

かくいふ

② けふをはしめの

③ されとも

④ ありて

⑤ ナシ

⑥ ナシ

⑦ 其宿

① より

② ナシ

③ 此所

④ 宿を通る

⑤ 所から

⑥ 日なかの里

⑦ しもひと

かち人の東の旅の草臥につえつき野とや

ひとのいふ覽やうく此野を過て^⑧石薬師

といふ^⑨所に着つゝきの里を庄野といふ此

所を^⑩通るにしもひとのかたる哥とハなに

事をいふそとへは其中に^⑪しる人や

ありけむ我思ふ事を三十一字^⑫にて

いふとをしへければさらハ哥よまむとて

ひたるさに行事かたきいしやくし

なにとしやうのゝやき米を喰とて其庄

の名物なれば手ことにこれをもとめ

て喰しもひとのうたにはよしやあしや

猶ゆきくくてかめ山といふ所に^⑬いたる^⑭山の

ある方を見れば時雨のふるやうに見えけり

名にし^⑮あふ都のにしの^⑯かめ山のやま

にもけふや時雨^⑰ふるらしほとなく関の

地蔵に着此せきのならひとてかほしらく

こしらへまことの地蔵かほしたる女どもの

錫杖にはあらて^⑱杓子といふ物を手ことに

うちふつて旅人とまり給へく^⑲労扶むく

日もくれぬこれよりさき二里ハなし通す

⑧ 里ありとへは

⑨ ナシ

⑩ 過るにしもひとのもの

⑪ うたしれるひと

⑫ とや覽にいふ也と

⑬ いたりぬ ⑭ かの山

⑮ を見て

⑯ かめ山もたかまこととや

⑰ 初らし

⑱ しやくしとや覽

⑱ ましと聲くにいふ

あつさ弓はるくきぬる旅人を爰にて

せきの地藏かほする吾にハ罪過もなし

たのむまし教外別てむかく南無あミ

の塩辛腹もふくる、ほとくひたれは

杓子にてすくはずともと²¹聲もはやいか

にいひて猶馬をはやめて²²坂の下の

里に着一宿

⑲ ましきと

⑳ のほる

⑲ とて ⑳ ナシ

㉓ 鈴鹿の坂のした

三日天^①晴風閑也此坂の下^②ハ四方に山

を戴溪深く水の流れ目慣ぬ様

の所也^③山の紅葉^④はさなから唐紅をか

さしたる^⑤こ、ちしてゆきも^⑥やらす

いろく^⑦の紅葉をかさす坂のした^⑦を振

捨かたき鈴鹿山哉^⑧やうく^⑧坂を^⑨よちて

⑩ はるく^⑩の山路をしのきて^⑪土山を過て

水口の里に^⑫かゝる過し^⑫三月の初^⑬通り

し事思ひいて、左右の田つらを

見やりて

水口を縄代に見しあふミ路をかへれ

① 遠 ② なし

③ さなから山、の ④ から紅を

⑤ 心地す ⑥ やらて

⑦ ナシ

⑧ ナシ ⑨ のほりて

⑩ ナシ ⑪ 土山の宿

⑫ 着此宿を ⑬ とをりける

は霜のおくて田となるそれより和泉河
わたりて石部の里過るほとに京より

関むかへとて人く来る¹⁴かたりてゆくく

鏡の山を見れば時雨の雲にかくれたり

心ありて時雨にくもるか、み山やつれ

ぬる身の影を見せしとかくいふより¹⁵又

雲¹⁶晴てくもりもなし

旅衣やふる、影を見えしとてかさ

きて¹⁷腰をか、み山かなぬきあしに成て

いそきて草津の里を¹⁸過て矢橋の渡に

着あたりの人く¹⁹きたりて舟に乗る

折ふし追風吹大ひえをなかめて

追風に舟はやはせのわたしなれと

やふれ衣に身はひえの山²⁰と戯事

うちかたらひこかれゆくから崎の松

なから山²¹なかめやりて

からさきの松ときくよりかへりきてむかし

なからの山を見るかな²²ほとなくうち出のはまに

着此所のあつかり人ことに我したしき人なれば

つねのひとよりハねんころにいたはる²³ほとにはや故郷

⑭ 故郷のこときくくゆくほとに

⑮ ナシ

⑯ 晴くもりなし又

⑰ こ、

⑱ うちこえ

⑲ 見れは見しひとのおほく

⑳ ナシ

㉑ 見やりて

㉒ うちいて

㉓ ナシ

にもきぬる²⁴こ、地し侍りける秋の夜のちよを
一夜の²⁵こ、ろにて此夜ハ寝もせてあかす

②4 こ、ろなむして
②5 こ、ちして其夜

四日天¹晴陰されとも里ハ²うちてなれば相坂の
せきにかゝるせき山の紅葉³一きは勝たり少時
なかも居たり

① ナシ ② うちいて
③ を見て

花盛⁴うち出の里に立かへりけふあふ坂

④ うちいてし里

の紅葉をそみるせきこゆるに⁵人く⁶おほく

⑤ 又 ⑥ つとひきたる

ならひ居たり見れは見し人く也それかかれか

なといひてかちひとのわたるにぬれぬ花の

白浪と⁷なかもめてそこえし今はまたかへり

⑦ なかもめてそこえしに

相坂のせきふみならずとうちかたらひゆく

ほとに追分を過て山科のさとにかゝる又

京なるひと来たる⁸めつらしさにそこなる

⑧ 見れはたかひにこ、ろのそこひなくしたしき友なればことに

庵に立寄り⁹てしはく¹⁰物語してそれよりひの岡の

⑨ めつらしくそこなりける ⑩ ナシ ⑪ 物かたりなど

坂¹²のほる住馴たる都なれともはるくいのなか

わたらひに今帰て見れは目馴ぬ心地し

侍る東山の紅葉ことさら也¹³是までハ旅の行

⑬ 侍りける ⑭ つくく¹⁵と見て木すえも所から也色ハあつま二

衛¹⁵のつれく¹⁶なるま、になならぬおかし

⑮ つれく¹⁶さのあまりに物くるをしきと ⑯ もまかせ侍りし

き事をも筆に¹⁶まかせ侍る今ハ¹⁷はや

⑰ もまかせ侍りし

おほやけ事なとさしつとひ^⑮てきのふの
うさも戀しきほとに覺て都に入ぬ

⑰ナシ

⑱こゝろあはた、しきほとになり侍る

四、『辛酉紀行』伝本

ところで、『辛酉紀行』には数多くの伝本が現存しており、鴻池家本・益田家本以外にも遠州自筆本と指摘されている伝本が幾つか確認できる。また鴻池家本・益田家本と同様に定家様で書写された伝本も多く存在する。以下に他の現存する『辛酉紀行』伝本について提示する。なお現存する『辛酉紀行』伝本については遠州自筆であると伝承されてきたもの、個人蔵など原本調査の許可がおりないもの、現在所蔵者不明など、原本の調査を行うことが難しい伝本が存在する。そのため『補訂版 国書総目録』、新日本古典籍総合データベース、その他の蔵書目録ならびに図録によって現存する伝本について確認を行った。なお遠州自筆本であると指摘されている伝本には▽印を付し、定家様で書写された伝本は□で囲った。

○『補訂版 国書総目録』(十一本)

【所蔵】

国立公文書館内閣文庫蔵

【書名】

「関東道記」(『文鳳堂雜纂五〇』)

所収)

日比谷図書館加賀文庫旧蔵^⑲

「小堀遠江守殿江府道記」

彰考館蔵

「小堀遠州道記」(石見名所と合

冊)

宮内庁書陵部蔵

「小堀遠州辛酉紀行」

早稲田大学図書館蔵

「元和七年東海紀行」

東北大学狩野文庫蔵

「宗甫紀行」

▽龍谷大学図書館蔵

「日記」

高木家旧蔵^⑳

「宗甫道之記」

(活字)

『続群書類従』十八輯下

「小堀遠州辛酉紀行」

『続々群書類従』九

「元和七年東海紀行」

『大二本史料』十二編三八

「元和七季都路旅の記」

○新日本古典籍総合データベース(十五本)

【所蔵】

国文学研究資料館蔵

「小堀政一紀行」(「柴屋紀行」と合)

八戸市立図書館南部文庫蔵

『小堀遠州道記』

【彰考館蔵】

「小堀遠州道記」(寛永十九年下の紀行と合)

神宮文庫蔵

「関東道記」(『清渚集十六』所収)

大阪天満宮蔵

「小堀遠州遠江守東行之記」(「伊勢紀行」「東行紀行」と合)

大阪天満宮蔵

『小堀遠州東行記』

京都大学穎原文庫蔵

「小堀遠州公江府道之記」(「湯山懐紙」と合)

山懐紙」と合)

国立公文書館内閣文庫蔵

「宗甫都の紀行」(「賜蘆拾葉」第一集所収)

第一集所収)

国立国会図書館蔵

「東海道記」(『今古残葉十』所収)

彰考館蔵

「東海道の記」(「扶桑残葉集八」所収)

宮内庁書陵部蔵

「小堀遠州遠江守東海道紀行」(「片玉集四七」所収)

宮内庁書陵部蔵

「細川玄旨紀行」(「片玉集四七」所収)

宝山寺蔵

「東海道の記」(「扶桑残葉集八」所収)

西尾氏岩瀬蔵

「東海道の記」(「扶桑残葉集八」所収)

九州大学図書館蔵

「小堀宗甫君道記和哥」

○その他の蔵書目録及び図録(十二本)

【所蔵】

▽鴻池家旧蔵

不明(「旅日記」影印収載)

▽益田家旧蔵

「道之記」(「遠州会展観図録」他八冊に影印収載)

▽早稲田大学図書館蔵

「小堀遠州辛酉紀行」

▽国立公文書館内閣文庫蔵

「小堀遠州侯道記」

▽京都大学図書館谷村文庫蔵

「小堀遠州侯東海道紀行」

▽国会図書館蔵

「元和七酉の九月紀行」

▽徳川美術館蔵

「東海道記」(「徳川義直と文化サロン」影印収載)

▽個人蔵

「道のき」(「定家様」影印収載)

▽個人蔵

「道のき」(「定家様」影印収載)

所蔵不明

「小堀遠州旅日記」(「澗標」²¹影印収載)

津本信博氏旧蔵

「小堀政一東海道紀行」(「近世紀行日記文学集成」²²「翻刻収載」)

小堀宗通氏旧蔵

「元和七年九月紀行」(「小堀遠州東海道紀行」²³「翻刻収載」)

(複製本)

▽天満堂書店複製²⁴

「あつまよりの道のき」(「道のき」²⁵)

以上、今後新たに発見する可能性はあるが、『辛酉紀行』には計三十八本の伝本が現存する。

特に注目すべき点として、遠州自筆本と指摘される伝本七本のうち、六本が定家様で書写されていることが指摘できる。つまり定家様で書写された伝本であることが、鴻池家本・益田家本が遠州自筆本として伝承されてきた理由である可能性が指摘できる。

五、遠州流における定家様について

定家様は藤原定家(一一六二〜一二四一)を祖とする書風である。武野紹鷗(一一五〇〜一一五五)が定家の和歌の精神と茶道の精神は相通じるものであるとし、茶会の床飾りに定家筆の色紙を用いて以来、茶道において尊重されてきた。遠州も紹鷗に倣い定家の書を収集し床飾りに用いている。さらに遠州は和歌の師である冷泉為頼(一一五九〜一一六七)に定家様を学び、自ら定家様を書いた²⁶。遠州は定家様の上手として高い評価を受けており、その筆蹟は定家の書と見まがうほどであったという逸話²⁷も語られている。遠州が定家様を学び自家薬籠中のものとしたことについて、遠州流十二代家元である宗慶氏は以下のように述べている²⁸。

武野紹鷗が茶の湯を開眼した定家の歌心を知ることが茶の湯の心を知ることにもなるのである。遠州は珠光―紹鷗―利休―織部と受け継いできた茶の湯の侘び心に王朝を代表する和歌の境地を加味した「綺麗さび」の茶の湯を大成させるためにも、定家への心酔、定家の書風への傾倒が欠くことのないものであったのである。

「綺麗さび」とは「遠州流茶道の真髓」を称した語である²⁹。つ

まり定家様は、遠州の茶道の精神を象徴する筆蹟であつたと推考される。また遠州の定家様は、主に遠州によつて選定された茶道具の箱書に用いられている。茶道具の箱書は茶道具の銘やその由来を明示することによつて、茶道具の価値を保証するものである。遠州は茶道具の選定に際して、和歌の歌意による銘いわゆる歌銘をつけ、銘の由来となつた和歌を定家様で箱書した。遠州が歌銘と定家様の箱書によつて次第を調えることによつて、無名の茶道具に名物としての新たな由緒が生まれるのである。茶道具は茶人遠州の象徴であり、その箱書に用いられた定家様もまた茶人遠州を象徴する書風として扱われたと推考される。

また遠州の子息や遠州の茶道を継承した弟子たちが遠州に倣い定家様を用いている。²⁹⁾さらに遠州流十三代家元である小堀宗美氏が、遠州流宗家における定家様について以下のように述べている。³⁰⁾

遠州流の小堀家の字というのは定家様といつて、この藤原定家卿につながる定家様を流祖、遠州公が非常にその当時江戸初期の能書であり、それ以降二世三世四世とずっと連綿とその字を受け継いでいると。(中略)遠州流だけが同じ、先祖からのずっと同じ字を連綿と継承して行くと、ある意

味では、茶道のお点前、そういったものと同じような意味合い、同じような重要さとして、和歌と文字がある、というふうに言われておりました。

以上のように、遠州流において定家様が流祖遠州を象徴する筆蹟であり、遠州流宗家において流祖より継承されてきた流派の書風として、強く意識されてきたことが確認できる。ゆえに定家様で書写された鴻池家本・益田家本が、遠州流において遠州自筆本であると伝承されるに至つたと指摘できるのである。

おわりに

小稿では遠州自筆本と指摘されてきた『辛酉紀行』伝本である鴻池家本・益田家本について、これまで提示されていなかった本文全文に確認できる異同を提示した。そして鴻池家本が初稿本であり益田家本がその改稿本である可能性は低く、また遠州自らが書写したテキストである可能性も低いことを指摘した。

また遠州流において定家様が流祖遠州の筆蹟として重要視されきたことを確認し、定家様で書写された伝本が、遠州流において遠州自筆本として伝承されるに至つた可能性を指摘した。

茶道流派・遠州流において定家様で書写された『辛酉紀行』伝本を流祖の自筆であると認定することが、流派形成における施策であったと推考される。なお遠州自筆の『辛酉紀行』伝本の存在を示す最も古い記録は、遠州流宗家が所蔵する遠州の藏品目録『秘蔵奇財帳』である。宗慶氏は『秘蔵奇財帳』について「この奇財帳の筆者はその筆跡及び状態から二代大膳宗慶と考えてよいと思う」と遠州の嫡男小堀正之（二世宗慶、一六二〇～一六七四）によって作成された目録であると指摘し、次のように述べている。⁽⁹⁾

遠州嗣子備中守宗慶が父遠州生存中の其の意を体して作成したものが、遠州没後小堀家子孫に残す意図で書したものは判明せぬが、遠州所持道具の内より秘蔵し永代伝える諸道具を書き抜いた台帳である事は間違いない。

つまり遠州の後を継いだ正之の代にはすでに、定家様で書写された『辛酉紀行』伝本が遠州自筆本であり、小堀家の秘蔵物として扱われていたことが確認できる。流祖遠州の自筆本として権威付けられた『辛酉紀行』伝本は、流派の正統性や権威を示す役割を持って、遠州流宗家において伝承されてきたと指摘できるところではないだろうか。

〔注〕

- (1) 藤原みずき「『辛酉紀行』伝本に関する研究―鴻池家旧蔵本・益田家旧蔵本について―」(『千里山文学論集』第一〇一号、関西大学大学院文学研究科、二〇二二)
- (2) 「遠江守政一紀行」(『群書解題 十二』、続群書類従完成会、一九六〇)
- (3) 藤田恒春「小堀政一の居所と行動」(藤井讓治編『近世前期政治的主要人物の居所と行動』、京都大学人文科学研究所、一九九四)
- (4) 『源敬様御代御記録 第一』元和七年十月朔日条、八木書店、二〇一五
- (5) 井上宗雄「小堀遠州の文学」(『淡交』三三二、淡交社、一九七八)
- (6) 小堀宗通「小堀遠州東海道紀行」、村松書館、一九八五
- (7) 森蘊「小堀遠州」、創元社、一九七四
- (8) 小堀宗慶「小堀遠州東海道旅日記上り下り」、小堀遠州顕彰会、一九九二
- (9) 益田孝・高橋義雄編『遠州蔵帳図鑑』下編、宝雲舎、一九三八
- (10) 『特別展 小堀遠州とその周辺―寛永文化を演出したテ

クノクラートー」、市立長浜城歴史博物館、一九九七

(11) 『遠州会展観図録』、審美書院、一九二四

(12) 注一に同じ

(13) 内閣文庫本は益田家本と同じく定家様で書写された卷子本である。また本文の行取り・字母の選択が一致することから、益田家本の転写本であると推考される。以下に内閣文庫本の簡単な書誌を示す。

卷子本一卷。表紙題簽に「小堀遠州侯道記」、内題なし。定家様の筆蹟。文政十一年（一八二八）七月、幕府の書物奉行であった石井至毅（一七七八〜一八六一）の朱筆による注記・校訂がある。

(14) 『補訂版 国書総目録』第三卷、岩波書店、一九八九

(15) 現在は東京都立中央図書館蔵

(16) 現在は天理大学附属図書館蔵

(17) 『辛酉紀行』項には刈谷市中央図書館蔵村上文庫本も挙げられているが、本文の内容は『柴屋紀行』であったため記載しない。

(18) 益田家旧蔵本は以下の図録等によって一部影印を確認できらる。

① 『遠州会展観図録』 審美書院 一九二四

② 益田孝・高橋義雄編『遠州蔵帳図鑑』下編 宝雲舎

一九三八

③ 『遠州の数寄』 根津美術館 一九七八

④ 『大名茶人小堀遠州をめぐる 茶道美術工芸展』 青森県立郷土館 一九八六

⑤ 『芸術新潮 一九九六年二月号』 新潮社 一九九六年一月二十日

⑥ 『特別展 小堀遠州とその周辺―寛永文化を演出したテクノクラートー』 市立長浜城歴史博物館 一九九七

⑦ 『関西の書家百人展 併催／「小堀遠州の書」』 産経新聞社 一九九八

⑧ 『小堀遠州「綺麗さび」の心』 平凡社 二〇〇九

(19) 『徳川義直と文化サロン』、徳川美術館、二〇〇〇

(20) 『定家様』、五島美術館、一九八七

(21) 『濔標・大阪古典会創立九十周年記念古典籍善本展観図録』、大阪古典会、一九九二

(22) 津本信博「小堀政一東海道紀行」『近世紀行日記文学集 成一』、早稲田大学出版部、一九九三

(23) 注六に同じ

(24) 遠州自筆本（卷子本）の複製

(25) 『冷泉正統記』 大進匡聘著、天保六年（一八三五）成立

(26) 横井時冬『小堀遠州／本阿弥光悦』、裳華書房、一八九六

遠州が定家様の神髓をよく得られしことは前にくはしく述べ置きしが今また左に一の佳話をか、げてます。其事實なることを確めぬ。

『校合雜記』

小堀遠州政一號紫甫は茶之湯の達人なりまた手跡は定家卿の筆のあとを慕ひ習學て定家卿の墨跡に見まかひたるとなりある時加賀大納言定家卿の筆を一幅買求められ遠州をまねきてこれこそとてその掛物を馳走せられしに遠州みられけれどもかつて賞美せられず座付何となく物さびしければ取持に参りたる坊主など遠州にさ、やきけるにあの掛物求め御覽に入たきとてわざと今日貴公を請し申されたり定家卿の筆なれば一しほ御譽被_レ成候べき事やといへり遠州うちわらひあの掛物正しく我書にて候右證據も分明なり依て最前より心付たれども馳走に我手跡をいかで譽申さるべきやといはる、に坊主共その能書なる事を感じて返答に及ばず興をさましけるとなり

(27) 小堀宗慶「数寄大名 小堀遠州の書風」(『関西の書家百

人展 併催／「小堀遠州の書」、産経新聞社、一九九八)

(28) 遠州茶道宗家公式サイト「遠州流茶道とは」

<https://www.enshuryu.com/enshuryu/> 二〇二〇年十一月二十八日確認

(29) 小松茂美「定家の尊重と定家流」(『日本書流史』、講談社、一九七〇)

遠州のあとは、一族悉くこれに倣い、定家流を書いた。とりわけ二男政尹(通称権十郎、一六二五～一六九四)は「書体父ニ受テ又一風アリ」(『名家全書』卷六)といわれるように、その出藍を歌われている。

(30) 小堀宗実「小堀遠州と定家様の書」(『定家のもたらしたもの』、翰林書房、二〇一八)

(31) 小堀宗慶「遠州所藏道具目録考」(『遠州の数寄』、根津美術館、一九七八)

(ふじわら みずき／本学大学院生)